

悲嘆症状と関係的相互依存的自己観，個人的目標の関係について

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
宮脇晃

親密な他者との離別により人は様々な心理的・社会的困難を経験する。このような困難は自然である一方で、彼らが援助を求める場合に適切な援助を行うことが望ましい。本研究では、離別による悲嘆症状をセルフ・アイデンティティとの関係から検討する。仮説として、RISC 尺度(他者との関係を自己定義に含む自己観を持つ程度を測定する尺度)得点が高いほど悲嘆症状の表れは強くなるということ(仮説 1)，仮説 1 の関係は他者からの回避傾向によって媒介されるということ(仮説 2)，RISC 尺度得点が高いほど悲嘆に関する個人的目標の数が多いこと(仮説 3)，悲嘆に関する個人的目標が多いほど悲嘆症状の程度は強くなること(仮説 4)，そして悲嘆に関する個人的目標の理由が悲嘆症状の程度と関係すること(仮説 5)，を立てた。大学生と社会人 185 名を対象に質問紙調査を実施し、そのうち 78 名のデータを分析の対象とした。主な調査項目は、関係的相互依存的自己観尺度(以下、RISC 尺度とする)、親密な他者からの回避傾向尺度、離別体験についての質問、悲嘆反応尺度大学生版尺度、悲嘆に関する個人的目標についての質問、そして悲嘆に関する個人的目標の関係的自律的理由と個人的自律的理由についての尺度であった。 t 検定を行った結果、RISC 尺度得点の高い群において「身体不調」得点(有意)、「無意味感・空虚感」得点(有意傾向)、「不安・抑うつ」得点(有意)が高く、仮説 1 は部分的に支持された。回避傾向と悲嘆症状には関係が見られず、仮説 2 は支持されなかった。RISC 尺度得点の高い群で悲嘆に関する個人的目標数が有意に多い結果となり、仮説 3 が支持された。悲嘆に関する個人的目標が多い群で「不安・抑うつ」得点(有意傾向)が高く、仮説 4 は部分的に支持された。悲嘆に関する個人的目標の理由が個人的自律的理由でない場合(個人的統制的理由)は悲嘆症状得点(有意)が高いが、関係的自律的理由でない場合(関係的統制的理由)は悲嘆症状得点(有意)は高くはなく、仮説 5 は支持された。以上のことから、本研究はセルフ・アイデンティティが悲嘆症状と関係するという先行研究を部分的に支持する結果となる。さらに、関係的相互依存的自己観に着目した援助を検討することができると考えられる。